

2018年4月15日(日)

主 題：「私たちが近づいたお方」

—御国のすばらしさ—

テキスト：ヘブル人への手紙12章18－24節

### はじめに

- ・どんな人にも、一度は苦い経験があるものです。  
私も小学生頃に経験した、忘れられない「思い出」があります。私の幼友達の一人に、電気屋さんの息子がいました。ある時、彼の家へ遊びに行きました。家とお店は同じでした。
- ・彼は一つの電球を取り出して、その電球にうまく電流が流れるかどうかの実験（テスト）を見せてくれました。もう60年以上も昔のことで、今のように蛍光灯やLED電球がまだ無かった時代でした。もちろん当時は大型電気量販店もなく、電球は電気屋さんで購入するのが一般的でした。
- ・その店では、電流を流して電球が壊れてはいないかどうかを、一つずつソケットに入れて、チェックしていた時代でした。電球が正常であれば、電流が流れ明かりがつきます。もちろん電気スイッチが入ってなければ、当然のこと電球に明かりはつきません。
- ・そこで彼はイタズラで、こんなことをしたのです。  
まず電流は流れていないことを、電気スイッチを切って見せてくれました。そして彼は自分の指をソケットに差し込み、確かに電流が流れてないことを証明しました。次に彼は私に、「同じように指を差し込んでごらん。安全で大丈夫だから」と言いました。
- ・そこで私は彼の言うとおりに、ソケットに指を差し入れてみました。ところが、指を差し入れるや否や、100ボルトの電流が流れ、私は瞬間的に『あぁ！』と叫びました。電気屋さんの息子は、私の見えないところで、どうも電源をオンにしていたのでした。
- ・皆さん！今では笑い話ではありますが、当時の私にとっては、大きなショックであり苦い経験でした。それ以来、私は電気の「ビリビリ」が怖くなってしまいました。そして電流が流れているところに「近づき」、触れることに不安を覚えるようになったのでした。
- ・私たちはこのような苦い経験をすると、「近づく」という点で不安をいただくものですね。皆さんは、いかがでしょうか。きっと私のような腕白な幼友達はいなかったでしょう。
- ・時々、日本社会では、「あの人には近づかないこと！」と聞くことがあります。そこには、何かがあると思われれます。「近づく」とはどういうことでしょうか。ところで、今日の聖書テキストを注意して読むならば、著者は「近づくこと」、「近づかないこと」、という二つの対比語を述べていることが分かります。そこで、私たちはその2点について掘り下げてみましょう。

### 大切なポイント

#### 1. 「近づかないこと」と「近づくこと」

- ・12章18節から24節を読みますと、「近づかなかったこと」、「近づいたこと」が書かれています。では、何に「近づかなかった」のか、そして「何に近づいた」のでしょうか。

#### 1) 近づかなかったこと

- ・イスラエルの民は、エジプトから脱出して3か月目に、シナイ山麓にいました。そしてモーセは神の命令を受けてシナイ山に登り、神から「十戒」を授かりました。
- ・出エジプト記 19 章は、そのことを記録していますが、著者は次のように述べました。
  - 12:18 **あなたがたは、手でさわれる山、燃える火、黒雲、暗やみ、あらし、**
  - 12:19 **ラツパの響き、ことばのとどろきに近づいているではありません。**  
このとどろきは、これを聞いた者たちが、それ以上一言も加えてもらいたくないと願ったものです。
  - 12:20 **彼らは、「たとい、獣でも、山に触れるものは石で打ち殺されなければならない。」というその命令に耐えることができなかったのです。**
  - 12:21 **また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れて、震える。」と言いました。**
- ・皆さん。「十戒」は恐れの中で与えられました。それはなぜかと言えば、神の聖さと威厳をイスラエルの民に示すためでした。ですから、神が臨在される山に人が近づけば、殺されなければなりませんでした。そのことを教えるために、神はモーセの他だれもその山に登って来ては行けない、と仰せられました。もしもそれに違反すれば、殺されなければなりませんでした。
- ・では、なぜそのような状況の中で十戒は与えられたのでしょうか。それは人間に、罪の恐ろしさを教えるためでした。聖い神のみ前に、罪を持った人間が近づくことは許されませんでした。しかしながら、著者は次のように述べています。それは「近づいたこと」でした。

## 2) 近づいたこと

- 12:22 **しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。**
- 12:23 **また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、**
- 12:24 **さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。**
- ・ここで、何に近づいたかが述べられています。
  - 何にというのは方向を指し、英語では“to”（何々に）です。英語訳聖書では、上記の箇所には、その“to”が繰り返し何度も用いられています。つまり、何に「近づく」者になったかです。⇒
  - 「シオンの山に」、「生ける神の都に」、「天にあるエルサレムに」、「無数の御使いたちの大祝会に」、「天に登録されている長子たちの教会に」、「万民の審判者である神に」、「全うされた義人たちの霊に」、「新しい契約の仲介者イエスに」、「アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に」です。
- ・皆さん。これらのことから分かることは、預言者モーセと救い主イエス・キリストとの違いです。モーセが神から「十戒」を受けたシナイ山は、恐ろしいところでした。
  - 12:21 **また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れて、震える。」と言いました。**
- ・しかし、イエス・キリストが約束してくださった神の都である天のエルサレムは、素晴らしい所です。私たちはここで、何を学ぶことができるのでしょうか。それは人が近づけなかった所へ、近づけるようになったことです。しかも律法という行いではなく、恵みによって可能となりました。
- ・では、恵みによって「近づく」とは、どんな道でしょうか。

## 2. 私たちが近づくお方イエス・キリスト

### 1) 律法によっては近づけない

- ・まず私たちが教えられる点は、律法を守ることによって、神に近づくことはできないことです。モーセがシナイ山で与えられた律法は完全でした。そこには燃える火、黒雲、暗闇、あらしなどがありました。だれもが恐れるような所でした。
- ・律法によって容赦なく罪を裁く神は、近寄りがたい存在でした。今日でも、ある人々はこのように神を見えています。自らの罪を断罪されるのではないかと恐れ、神のもとに行こうしないのです。神はさばき主であることは事実です。
- ・しかし、ここで私たちが知らなければならないのは、人間がどんなに努力して律法を守ろうとしても、完全に守ることはできないことです。ですから、律法によっては、神の望まれる人間にはなれないということです。
- ・では、なぜ神は律法を与えられたのでしょうか。 **ガラテヤ人への手紙**  
3:24 こうして、律法は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。  
律法は養育係でした。つまり導き手でした。それは人は律法によって、神に近づけないことを教え、信仰によって義とされることを明らかにするためでした。

### 2) 神の子とされる祝福

#### ① 恵みによる特権

**12:22** しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。

- ・これは天の王国のことです。ヨハネ黙示録 21 章 9 節から 22 章 5 節に記されている「新しいエルサレム」のことです。

**12:23** また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、

長子たちの教会とは、初めに生まれた教会のことです。そこに名前が登録されているのは、神を信じキリストの救いに与った人たちです。イエスは言われました。 **ルカの福音書**

**10:20** 「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

- ・神の子どもたちは「いのちの書」に、その名前が登録されています。それは、恵みによって与えられた特権です。なぜ、このようなことが起こったのでしょうか。それは全知全能の神が、イエス・キリストという人間の肉体をとり、この世に来てくださったからです。今私たちが恐れることなく、神に「近づける」ようにしてくださったからです。イエスは言われました。

**ヨハネの福音書**

**14:6** イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

- ・さらに著者は述べました。

**12:24** さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。

「新しい契約」は、山羊や羊や牛の血によるのではなく、アベルの血に勝るキリストの血によって結ばれた契約です。

- ・この近づけるお方こそ、イエス・キリストです。イエスは律法によるのではなく、神のもとに行ける道を開いてくださいました。イエス・キリストを信じるだけで、このことが可能になりました。
- ・それは私たちが神に近づくことができないので、神の方から近づいてくださったからです。そして信じる者の名前を、「いのちの書」に記してくださいました。これこそ恵みによって与えられる特

権です。さらに神は祝福を与えてくださいました。

## ②恵みによる希望

- ・神は信じる者に、天国のすばらしさを見せてくれます。  
私たちの信仰生活は長距離です。長い距離を走るには持久力が必要です。どこに向かって走っているか分からなければ、途中で弱り疲れ果ててしまい、もう先に進めなくなるかも知れません。
- ・地上の教会には、なお問題がないわけではありません。というのは、教会を構成している一人一人の救いが、まだ完全に完成していないからです(完成は地上の生活を終えた後にくる)。ですから失敗もありますし、また敗北もあります。お互いに傷つけてしまうこともあります。なかなか赦せないこともあります。そういうことによって失望することもあります。
- ・私たちがそのようなことばかりに目を向けていると、信仰生活という長距離競争を、途中欠場しようとする思いに駆られてしまいます。ですから、私たちにとって大切なことは目前にあるゴールを見ることです。私たちはそこへ行くことは、確かなのですから。
- ・ここで「近づく」という言葉(英訳：12:18、22)は、完了形が用いられていることに注目ください。もうすでに、重要なことが決定的に起こったという意味です。完了形ですから、将来いつ起こるかも知れないではありません。この地上の信仰生活において、私たちの心の中にはすでに天国があるということです。
- ・クリスチャンは、キリストにあつて天的地位にあるのだということを理解しないと、律法主義的なものと世俗的なものとの間を、さ迷い続けることとなります。
- ・ですから、神と交わりをしないで、地上のものに心を向ける (to) ようになれば、当然世俗的な生き方をするようになります。そして天のものを自力で得ようとし、喜びのない律法主義に陥ってしまいます。私たちは神の恵みによって、天に結びつけられたのだということを、いつも覚えることが大切です。
- ・神が用意してくださっている天国は、本当に素晴らしい所です。聖い、威厳のある神に罪人のまま近づくことは、実に恐ろしいことです。震えおののかなければなりません。しかしイエス・キリストの恵みによって、哀れみ深い神に (to) , 何の恐れもなく、むしろ喜びと感謝をもって近づくことができるのです。
- ・そればかりではありません。やがて、イエス・キリストにお会いできるのです。今はぼんやり映っているようにしか見えません。しかし天国においては、顔と顔を合わせて見るように、はっきりと見るようになるようになります。**1コリント13章**  
13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。
- ・私たちがこれから行こうとする天国が、どういう所であるか分かってくると、元気が出て一生懸命に走り通すことができるのです。このことが分かると、私たちは救いの確信を持つことができます。そして安定した信仰生活を過ごすことができるのです。
- ・私たちは天国のすばらしさをもっとよく知り、それが確かに私たちのものであると分かってくると、さらに私たちの信仰生活は生き生きしたものになります。ですから、そのすばらしさをもっとよく知ろうではありませんか。
- ・では、どうすれば、天国の幸いをもっと知ることができるでしょうか。  
それは神のみことばを通してです。みことばは命の糧で、御霊の働きによって天国の奥義を明らかにしてくれます。⇒ 日々、心を静めて、主との交わりを大切にすることです。

・私たちは心から、この恵みをよる特権と希望を感謝し受けとめようではありませんか。

### まとめ

主 題：「私たちが近づいたお方」  
—御国のすばらしさ—

- ・ 今日、私たちは信仰によって主の御声を聞きました。いかがでしょうか。  
私たちは今、何に「近づいて」いるのでしょうか。律法ではなく、恵みの内に生きる道を与えてくださったイエス・キリストに「近づいて」いるのでしょうか。
- ・ 大切なことを覚えましょう。
  1. 律法では天国に近づけない
  2. 恵みによって天国に近づく
- ・ そして神のみことばと御霊を通し、主に近づき天国の幸いをさらに知る者とさせていただきましょう。

\* God bless you !